

小学校低学年における資質・能力の育成に関する研究

－「話し合い活動」を中核に置いた実践分析を通して－

企画者 若松 昭彦（広島大学大学院教育学研究科）
若松 美沙（福山市立大学大学院教育学研究科）
司会者 横山 謙治（前広島県公立小学校校長）
話題提供者 今崎 智代（岡山市立竜之口小学校）
湯山 桃子（岡山市立竜之口小学校）
指定討論者 川原 陽子（庄原市立美古登小学校）

KEY WORDS：資質・能力 共生社会 「話し合い活動」 言動分析

【企画趣旨】

文部科学省（2016）「特別支援教育部会における審議の取りまとめ」によると、小学校の全ての学級には、発達障害等の児童が在籍する可能性があることを前提として、自立や社会参加に向けて必要な資質・能力を身に付けていくことができるように、最適な学びの機会を確保していくことが重要であると述べられている。必要な資質・能力とは、多様性を尊重し、協働して学級・学校生活を送ることのできる、共生社会の実現に寄与する能力であると考えられる。また、学んだことを、実社会の様々な場面で活用できる汎用的な能力に更に育てるために、教科等横断的な学習活動の1つとして、「特別活動」の重要性が挙げられている（文部科学省、2016）。

「特別活動」は、自主的、実践的な集団活動を目指して、集団の一員として自己を生かし、豊かな人間性や社会性、自立性を備えた児童を育てることを目的としている。特別活動は、「学級活動」、「学校行事」等に分けられ、学級活動の中の「話し合い活動」は、児童が司会グループとフォロワーに分かれて、学級・学校内の諸課題を発見・解決する活動である。児童たちは事前に自分の考えを学級会ノートに記入し、話し合いでは、司会グループが進行指名・黒板記録・ノート記録を行い、フォロワー同士が議題に沿って意見を述べ合い、多様な考えを尊重して合意形成し、集団決定していく。これは、前述した共生社会実現のために必要な資質・能力であり、この力を育成するために、教師も様々な「合理的配慮」を行っている。年度当初には、学級・学校生活の見通しをもたせるために、行事予定表や過年度の活動の具体例を示したり、話し合い活動を構造化・可視化・操作化し、全ての児童にとって理解しやすい流れにしたりしている。発言しにくい児童に対しては、場面ごとに話型を示し、意見をもちにくい児童に対しては、事前に意見を引き出す個別の声かけを行っている。司会には原稿を作成し、輪番制にして、全ての児童が運営側の役割を経験できるようにしている。また、話し合い活動で集団決定したことを実践することによって、自分たちの学級・学校を自分たちの活動によって創造していきたいという動機づけや意欲を高め、話し合う内容の質の向上をねらっている。

そこで、本シンポジウムでは、小学校低学年における特別活動「話し合い活動」の実践事例を紹介し、共生社会の実現を目指して児童に育成すべき資質・能力の具体的な姿について理論的・実践的に検討することを目的として企画した。

【話題提供者の趣旨】

1 第1学年の実践分析 今崎智代（岡山市立竜之口小学校）
学級の実態として、数名の配慮が必要な児童が在籍している。日頃からお世話になっている6年生に対して、「6年生にありがとうの気持ちを伝える会をしよう」という議題で話し

合った実践（第12回目の学級会）を取り上げ、事前の司会グループによる計画委員会、話し合い活動、集団決定したことの実践後の振り返りについて、言動分析を行った。

計画委員会では、教師主導で、司会等に6年生との活動を具体的に想起させることで相手意識を明確化させ、意見整理や短冊準備等で話し合いのイメージを膨らませることができた。話し合い活動の逐語記録から、総言動数266中、児童たちの言動が253（95%）となり、根拠を示しながら発言し、自分たちで話し合っただけで集団決定を行っている姿が鮮明になった。話し合い後の自己評価からは、皆の力を合わせることの喜びや、他者の活躍を評価する記述が多く見られた。

上記のことから、児童たちはお世話になった6年生への感謝の思いを伝える活動を自分たちで考え、実践する一連の活動を通じて、大きな達成感を味わったことが見て取れた。

2 第2学年の実践分析 今中桃子（岡山市立竜之口小学校）

第1学年と同様、数名の配慮が必要な児童が在籍している。今までの経験をもとに1年生に楽しんでもらえる会を企画する「1年生をなかよしフェスティバルに招待しよう」という議題の学級会（第11回目）を取り上げ、分析を行った。

その結果、計画委員会では、教師が見守る中、司会等が中心となり実際の話し合いの流れを構想する姿が見られた。話し合い活動の逐語記録から、総言動数243中、232（95%）が児童の言動となった。司会は、少数意見や反対（心配）意見を尊重したり、話し合いのめあてを意識した話し合いになるように配慮したりしていた。また、フォロワーからは、1年生を具体的に思い描き、思いやりの心をもった意見が多数出され、「人のため」、「自分たちのため」という互恵的な協力関係が育まれていることが示唆された。フェスティバル後のほとんどの感想には、1年生が喜んでくれたことへの嬉しさと、次の活動はもっと工夫したいという気持ちが記されていた。

（尚、本発表に当たっては、協力校の承諾を得ている。）

【指定討論者の趣旨】

次期学習指導要領でも特別活動において、集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだし解決するために話し合い、合意形成を図ったり意思決定したりすることは、思考力、判断力、表現力の育成だと位置づけている。しかし、その力を身につけさせるには、適切な指導と多くの経験が必要である。そのために、義務教育9年間のうちの6年間でどのように児童の発達段階や個人差に応じた指導をしていくのかという見通しや系統性に留意した指導の整理が各学校では必要となってくる。竜之口小学校の実践を基に考えてみたい。

（WAKAMATSU Akihiko, WAKAMATSU Misa, YOKOYAMA Kenji, IMASAKI Tomoyo, IMANAKA Momoko, KAWAHARA Yoko）